ピットワーク

綾瀬　涼介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピットワーク

【Ｎコード】

Ｎ６２４４Ａ

【作者名】

綾瀬　涼介

【あらすじ】

主人公涼がメカニックとして成長していく様子を書きます！

第一話〔整備工場〕

２００６年４月１日早朝
俺は今日から社会人となり仕事を始める・・・
職業はメカニックだ！
その前に話は中学生の頃に戻る・・・小さいころから機械をいじるのが好きで家にあるものを端から端まで分解しては組み立て
そのたびに親父の怒声が響いていた
それから数年して俺に転機が訪れた
それは俺の住んでいる町で細々とやっている自動車の修理工場を通った時だった
いつもは閉まっているはずのガレージが開いていたのだ
俺はそーっとガレージの中を覗いてみた
まず目に付いたのが工具だったピカピカに磨かれた工具は
長い間使われていたにもかかわらず一つ一つ綺麗に磨かれ整理されていたのだ
「うわーすげー」
俺は思わずそう叫んでしまった
すると店の奥から１人の小柄な何処にでもいそうな４０前半位のオッサンが出てきた
「おう坊主そこで何してんのや？」
俺は慌てて
「なっなっ何もないですー」
と言って逃げようとしたらオッサンが
「まぁ待てよこういうのに興味あるんちゃうの？だから覗いてたんやろ？」
「はっはいまぁ機械は好きです」
「そうやろーまぁ覗いてらんと中入ってきーや」
「あっありがとうございます！」

俺はガレージの中へ入っていった・・・
そこは俺にとって夢のような所だったドライバー・レンチ・ジャッキ全てが自分のものになったらなー
と想像してしまうほどだ
するとそこに1台のハチロクが入ってきた
〔ブロローウォンゥォン〕
その頃俺は車についてはあまり知らなかったのでフーンと思ってそれを見てただけだった
〔ガチャ〕↑ドアを開ける音
「親父ー中村さん家のハチロク預かってきたでー」
「おう修司かごくろうさん」
修司とはこのオッサンの子供だ
「おっなんやこのガキは？」
「はじめまして・・・」
とりあえず挨拶だけしたするとオッサンが
「あーそいつなさっき外で珍しそうに中覗いてたから中入れたったねん」
「へーそうやったんやーおいガキ名前なんていうんや？」
あー失礼読者のみなさんにも紹介がまだでしたね
主人公の名前は太田　涼どこにでもいそうな中学生
「あっえーと太田っ太田　涼です」
「へー涼かよろしくなーまぁゆっくりしていきや親父の仕事は自慢じゃないけど凄いで！」
「ありがとうございます！」
仕事が凄いと言われたけど何が凄いのかその時俺は何のことか全く分からなかった
「よっしゃそろそろし始めよか涼はそこで座って見といたらいいからな」
俺は頷いた何が始まるのか楽しみだった
「修司始めるぞー！」

「はいよー」
修司がハチロクをジャッキアップする
その下にオッサンがもぐって何かしてるようだ
「2番のレンチ」
「はいよ」
次々と作業が進んでいく
どこかで見たことがあるような気がした・・・
あっそうか手術だまるで手術のように作業をしているのだ
「凄いやこういう事だったんだ・・・」
俺はそれに見とれてしまった
ふと気づくとあっという間に時間が過ぎていた俺は
「もう時間なんでそろそろ帰りますー」
と言うとオッサンが
「おっそうかまぁ気いつけて帰りやー店は午後からやってるから好きなときにまた見にきいや」
と言ってくれたのだ俺は喜んで
「はい！また見に来ますーそれじゃー」
と言って家に帰った
家に帰るとまた親父の怒声が待っていた
「コォラー涼！今までどこほっつき歩いてたんじゃー」
「ごめん父さんちょっと友達ん家行ってきたんだよ」
「だまれ今日の飯は無しじゃーとっとと上に行って寝れ！」
俺はダッシュで自分の部屋に入った
「ふー」
俺はわざとあそこに行ってたことを言わなかった言ってしまうと
今度から行けなくなってしまうからだ
前も時計屋で同じようなことをしてたら次の日親父が時計屋に行って
俺を入れないように言って来たのだ
だから絶対にあのことは言わないことにした
そしてその日以来工場に行くことは俺の日課になった家に帰ったら

遊びに行ってくるーと言って
毎日工場に行ってたのだ
そしてその頃から俺は将来絶対にこんな仕事をしたいと思うように
なったのだ！

第一話　完

あとがき
皆さん読んで下さってありがとうございました
私もまだまだ書き出したばかりいろいろと間違えや失敗もありますが
これからよろしくお願いします！
それと今回本文中で紹介できなかった登場人物を紹介します

太田　拓哉　　主人公　涼の親父　かなり怖いです
中西　淳二　　整備工場のオッサン修司の父親です　とても優しい

今回はこれだけにしておきます
第二話は話を元に戻して涼がいよいよメカニックとして働き始めます
次回もよろしくおねがいします

第二話〔北見モータースにて〕

話は第一話の初めに戻る
涼は中学生の頃からやりたいと思っていたメカニックについになったのだ
それまでの長い道のりは次回話すことにしよう・・・・
涼はあの整備工場　ではなく北見モータースと言ういつ潰れてもおかしくないような
まるで自転車を修理して食べ繋いでいるような修理工場の前に立っていた
「おはようございまーす！すいませーん誰かいますかー？」
〔ドンドンドン〕↑ガレージを叩いている音
「すいませーん誰くぁ
言っている途中に
「あーうっせーなー今行くから待ってろ！」
おっやっと来たと思い俺は1歩ガレージから下がって待つことにした
「はいはい、なんだよこんな朝っぱらからー自転車でもこわれたかー？」
うっなかなか怖そうな人だ・・・
「あっいやすいませんちょっとお話があって伺ったんですが・・・」
「はー新聞なら間に合ってるからいいよ、んじゃあな！」
ガレージを閉められかけたので俺は叫んだ
「ここで働かせてください！」
すると呆れたような顔で
「はぁー働かせてくれだー？ヴァカじゃねーのかお前だいたいお前整備士でもなんでもないだろー？」
「えっ！いえいえいちよう2級の整備士免許は取ってるんです！」
「なんだってー！！お前みたいな奴が2級だとー？」
かなりビックリしたようだでもお前みたいな奴ってそれはなしでし

ょー！
「まぁー持ってるんなら別にかまいやしないけどたいした仕事は無いし給料も無いに等しいぞ」
「はい、それでもかまいません。だからここで働かせてください！」
「はいはい分かった分かったまあとりあえず中、入っちゃってよ」
よっしゃーついに仕事を見つけた！ここからスタートだ！
普通スタートは順調に進む物だが俺の場合は違った
！！なんだここは
その工場は俺の想像していた場所とは、はるかに違っていた
「あのー工具はどこに置いてあるんですかー？」
「あー工具？そんなもんそこら辺に落ちてるだろうがよ」
〔カチャ〕何かを踏んだので俺は下を見たすると、そこには錆びまくったレンチが落ちてるじゃあないか！
俺はその時、苛立ちを感じた、しかし今辞めてしまったら他に働くところはあるのか？
そう考えると何も言えなかった・・・
ゴミは落ちてるし工具もメチャクチャおまけに電気まで来てないありさまだ
「ふぅー」
俺は思わずため息をついてしまったすると
「どうした？しんどいのか？」
と聞かれ俺は慌てて
「いえ、しんどくなんてありませんよ！」
と声をビックにして答えた〔ごまかした〕
廃タイヤの上に腰掛けて話をすることにした
「えーと俺はいちようこの店の店主の北見　渉って言うんだよろしくなお前は？」
「涼　太田　涼です」
「ふーん涼ねはいはい了解、今日はもういいから明日、朝６時に出勤ねまあそれまではゆっくり休んどいてや」

「あっはい分りました、じゃあ明日よろしくお願いしときます！お先ですー」
「気ぃつけてなー」
初めは怖そうに見えたけど話しているとなんだか優しい人みたいだどことなく、あの整備工場のオッサン〔一話参〕に似ているような気もする
工場でかなり話し込んだのでもう夜になってしまった。今日は疲れたんで家に帰って寝ることにした
まだマイカーは持ってないので家まではチャリ〔自転車〕で帰らなければならないのだ
４月とはいえ夜になればかなり冷え込む
「うわーさっむ早く帰って寝よう」
と言ったその時後ろから車が来た
〔ウォーン　パンパン　ヴィーン〕
真っ白のスカイラインＧＴ‐Ｒ３２だ
「へー凄いなーかなり作りこんである、あんなのに乗りたいよなー」
自転車を漕ぎながらどの車に乗るのかを考えているとあっという間に家に着いてしまった
家はボロイマンションだ家賃はたったの１万本当にボロくて今にも何か出そうだ・・・
その日は風呂に入って布団の上で車雑誌を広げて買う車を考えているうちに寝てしまった
次の日は朝５時に目が覚めた
服を着替えていよいよ出勤だ！

第二話〔北見モータースにて〕（後書き）

いやー第二話です
ありがとうございます
次回は今回の最初の方で予告したとおり
メカニックになるまでの道のりを
書くのでそちらも、どうぞよろしくおねがいしときます！それでは
また

第三話〔就職ｏｒ人生終わり？〕

話は涼がメカニックになる前に戻る・・・

「うへぇー今日から整備学校かよ・・・。」

そう今日から涼はついに自動車整備学校の生徒なのだ。

しかし整備学校にもいくつかのランクがあり

すばらしい技術をつけ

大舞台で活躍するようなメカニックを育成する学校があれば

また、そこらにありそうな整備工場のメカニックをそれなりに

育成する学校もある・・・

涼はというと・・・

親に散々頭を下げある程度援助してもらい、さらにバイトに明け暮れ

なんとか入学したのがＫ自動車整備学校だ

まぁ一流の中の下流というとこか・・・

本当ならもう１つランクが高いとこに入学できたのだか

実技テストで見事に滑って

現在に至るのだ。

「なんでこんなボロ学校なんだょ。」

とりあえず今日からメカニックの登竜門に立ったのだ

なんにせよ頑張らなければならない・・・

そんな学校ライフの中で

涼と友達になった奴もいた（今まで友達がいなかったｗ）

名前は小笠原　卓郎　（おがさわら　たくろう）

家が整備工という事もあり

涼よりも高成績で入学してきた人物である
何故そいつと仲良くなったかって？それは
Ｋ校にはいくつかのグループがあり
トヨタ党・ホンダ党・ミツビシ党・スバル党・ニッサン党と
様々な車会社のグループなのだ
涼はその中のニッサン党に所属？しているのだ
そこに卓郎も所属しており、さらに２人とも
ニッサン車の中でもスカイラインＧＴ－Ｒが好きので
話が合い友達？になったのだ。

話が飛びすぎるかもしれないが
どうか許してください・・・・・・　（〃・・）ノ

今日は自動車学校の卒業式！

涼は３級整備士の資格を取得しかし就職先は未定・・・
という状況で卒業になってしまったｗ

一方、卓郎は２級整備士の資格を取得し野川ワークスという
整備会社に就職が決定している（素晴らしい！）

「おぃおぃ卓郎！お前なにいっちょまえに就職先決めてるんだよ。」

「まぁお前とは頭の出来が違うしなぁぷぷぷｗ。」

「おぃおまｗいっぺん逝って来いｗ。」

「まぁまぁさっさと就職先決めて一緒に大舞台でメカやろうぜ。」

「あぁうんなことはわかってるよ・・・。」

「そか、それならいいんだ・・・んじゃまぁまた連絡するわぁ。」

「おぅんじゃあなぁ卓郎！。」

そう、俺たちは将来Ｆ１やＷＲＣでメカニックとして活躍したいと
おもっているのだ
まぁ今の状況じゃそんな事とても言えやしないけど・・・

「まぁとりあえず仕事探しからだな・・・。」

仕事探しを始めて何日たっただろうかｗ

どこに行っても
もう人足りてるから他あたってよ
の一点張り・・・

正直しょげるよなぁ
卒業してから２級整備士の資格もとった！
しかしこの現状はなんだ・・・
「不況とはいえこれはないだろう。」
ついつぃ溜息が出てしまう。

そんな涼の目に飛び込んできたのは
電柱に張ってある
ミミズが這っているような字で書かれている
張り紙だ内容は・・・

整備士急募集詳しくわ北見まで

！おぃおぃ整備つちってなんだょw
しかもその下にも募集要項が書いてあるが
古くなりすぎて解読不可能w

「まぁいっかとりあえず行ってみますか・・・・。」
もぅどんな藁にでもすがりつく思いだ・・・

3話完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6244a/

ピットワーク

2011年1月15日21時13分発行